

（論文）

# 旧約聖書の神義論—ヨブ記と詩篇の場合

本 多 峰 子

## I 問題の設定

本論はキリスト教における神義論の問題、すなわち、全能かつ善なる神に創造されたこの世界になぜ悪や苦難があるのか、神は悪の問題に対しいかなる解答を与えうるのか、との問題に答えようとする試みの一環である。特に、旧約聖書の中でヨブ記と詩篇を取り上げ、旧約時代のイスラエルの人々が悪や苦難に面して彼らの信じるヤハウエへの信仰をいかに保持しようとしたかを考察したい。

## II 序

旧約聖書では、悪は典型的には神の戒めへの背き、禍は背きへの罰であるとの見方が支配的であった。その見方は、申命記における、イスラエルの民に対する神の選びと救いの約束の宣言「あなたは今日、あなたの神、主の民とされた」（申命 27:9）と、それに続く、「あなたの神、主の御声に聞き従い、今日わたしが命じる戒めと掟を行わねばならない」（申命 27:10）という、戒めの授与の言葉に基づく。申命記史家の歴史観によれば、神の戒めに従うか否かが、個人の幸不幸を左右する。この応報思想は、具体的に申命記 28 章の預言に、

28:1 もし、あなたがあなたの神、主の御声によく聞き従い、今日わたしが命じる戒めをことごとく忠実に守るならば、あなたの神、主は、あなたを地上のあらゆる国民にはるかにまさったものとしてくださる。

2 あなたがあなたの神、主の御声に聞き従うならば、これらの祝福はすべてあなたに臨み、実現するであろう。

3 あなたは町にいても祝福され、野にいても祝福される。

4 あなたの身から生まれる子も土地の実りも、家畜の産むもの、すなわち牛の子や羊の子も祝福され、

5 籠もこね鉢も祝福される。

- 6 あなたは入るときも祝福され、出て行くときも祝福される。[…]
- 13 わたしが今日、忠実に守るように命じるあなたの神、主の戒めにあなたが聞き従うならば、主はあなたを頭とし、決して尾とはされない。あなたは常に上に立ち、決して下になることはないであろう。
- 14 あなたは、今日わたしが命じるすべての言葉から離れて左右にそれ、他の神々に従い仕えてはならない。
- 15 しかし、もしあなたの神、主の御声に聞き従わず、今日わたしが命じるすべての戒めと掟を忠実に守らないならば、これらの呪いはことごとくあなたに臨み、実現するであろう。
- 16 あなたは町にいても呪われ、野にいても呪われる。
- 17 籠もこね鉢も呪われ、
- 18 あなたの身から生まれる子も土地の実りも、牛の子も羊の子も呪われる。
- 19 あなたは入るときも呪われ、出て行くときも呪われる。
- 20 あなたが悪い行いを重ねて、わたしを捨てるならば、あなたの行う手の働きすべてに對して、主は呪いと混乱と懲らしめを送り、あなたは速やかに滅ぼされ、消えうせるであろう。
- 21 主は、疫病をあなたにまといつかせ、あなたが得ようと入って行く土地であなたを絶やされる。[…]

とあり、呪いは68節まで延々と続いて述べられている。このことから、人間に降りかかる災いや不幸はその人(々)が意識して、あるいは無意識に犯した律法違反に対する罰であると理解されるようになる。「禍の神義論」<sup>1</sup>の適用である。このことによって、神の正義に対する信仰は守られるのである。

しかし申命記史家以来のイスラエルの宗教において、「禍の神義論」がすべてを解決したわけではない。それどころか、旧約における主たる神義論的問いは、ここから起った。つまり、「禍の神義論」で一見説明不可能な義人の苦難や悪人の繁栄の問題である。

### Ⅲ ヨブ記

#### 1 序

義人の苦難の問題の代表的な表出はヨブ記である。旧約聖書において、申命記史家たちの禍の神義論に疑問を持ち、あるいは真っ向から対立する見方、「義人」の苦難の問題を禍の神義論では解決のつかない問題としてみすえる立場がそこにある。

ヨブは突然財産や子どもを失い、重い皮膚病に見舞われる。彼の友人はその苦難を彼が犯したに違いない罪の結果であると決めつける(4:7, 34:11 etc)。ヨブ自身も、時に自分の苦難は自分が過去に犯した罪、「若い日の罪」に対する神の罰ではないかと信じかけるほどである(13:26)。善行には祝福、罪には災いと応報思想を保持し続けようとすれば、災いを受けている自分はどこか罪を犯しているはずだと考えざるを得ないからである。

しかし、読者は冒頭から、ヨブが苦難にあってるのはただ、サタンがヨブを苦しめることを神が許したからにすぎないことを知っている。ヨブが「無垢な正しい人で、神を畏れ、

悪を避けて生きていた」(1:1) ことが語りのことばによって明示されているからである。しかも、これは、神がサタンに言うせりふによって裏打ちされる。「お前はわたしの僕ヨブに気づいたか。地上に彼ほどの者はいまい。無垢な正しい人で、神を恐れ、悪を避けて生きている」。これは、ヨブの潔白さを強調するように、二度、同じ言葉で繰り返されている (1:8; 2:3)。人間はいかに良く律法を守っていても不幸に陥ることがあるということがこの書の洞察である。「ヨブ記」は伝統的に知恵文学に分類されてきたが、箴言などの禍の神義論や因果応報の合理性を否定した「反抗の知恵文学」<sup>2</sup>なのである。

ヨブ記の成立年代は正確には分かっていないが、ほぼ学問的合意が成り立っているところによれば、バビロニアによるエルサレムの陥落 (587BCE) 後、紀元前5世紀頃までに書かれた。この説が正しいとすれば、ヨブ記の著者、あるいは著者たちは、紀元前8世紀の北王国の滅亡から紀元前6世紀のユダ王国の滅亡に至る民族の歴史を知っていたことになる。なぜ神の民であるはずのイスラエルが不信の輩である他民族に侵害され侮辱され滅ぼされるのか。<sup>3</sup> 申命記史家たちはこれを、イスラエルが背信の罪を犯した故に神が彼らに下した罰であり、他民族は神の道具として用いられているのだと解釈した。しかしそれに対し、ヨブ記は、理解しがたい苦難の理由については判断を保留し、ヨブの苦難の理由は究極的には人間の理解を超えたものであるとの認識に達している。神は人間に、「なぜ人間は苦しむのか」ということについては答えを与えないのである。

## 2 神の答え

神は、ヨブが発した苦難の原因についての問いには答えなかった。だからと言って、神が何も答えていないわけではない。

38:1 主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった。

2 これは何者か。知識もないのに、言葉を重ねて、神の経綸を暗くするとは。

3 男らしく、腰に帯をせよ。わたしはお前に尋ねる、わたしに答えてみよ。

4 わたしが大地を据えたとき、お前はどこにいたのか。知っていたというなら、理解していることを言ってみよ。

5 誰がその広がりを選んだかを知っているのか。誰がその上に測り縄を張ったのか。

6 基の柱はどこに沈められたのか。誰が隅の親石を置いたのか。[…]

ここから始まる神の応答の後、ヨブはこう、答えている。

42:2 あなたは全能であり、御旨の成就を妨げることはできないと悟りました。

3 「これは何者か。知識もないのに、神の経綸を隠そうとするとは。」そのとおりです。わたしには理解できず、わたしの知識を超えた、驚くべき御業をあげつらっております。

4 「聞け、わたしが話す。お前に尋ねる、わたしに答えてみよ。」

5 あなたのことを、耳にしてはおりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます。

6 それゆえ、わたしは塵と灰の上に伏し、自分を退け、悔い改めます。

ヨブが自らの苦しみに異議を唱え、神の義に疑問を投げかけた時、彼が求めた答えの代りに示されたのは、神がいかにかこの世界とそこに生きる者を創造し、彼らの生の営みを導く主であるかの例証であった。神は自分が創造主であること（38:4-11;36-38）、世界の限界を定め（38:6-18）、太陽も光も闇をも（38:12-15;19-21）支配する天の支配者であること（38:31-35）、自然現象（38:19-30）も動物界をも支配し導く主であることを自然界の光、鳥、動物などを取り上げて思い起こさせる。ここで重要なことは、それが、単に、被造物に対する神の権威を示しているだけではなく、すべて生きるもの、個々の動物や鳥の日々の営みに至るまでを支え、恵みによって導いているのが神であることを示していることである。これはヨブについてもまた、あらゆる時に神がその生を支えてきたからこそ、彼が今まで生き行為することができたのだと悟らせることでもあった。ヨブが神の答えに満足したのは、人間の知の限界を知らされて納得したというよりもむしろそのことによる。

### 3 ヨブにとっての苦難の問題とその答え

ヨブが自らの苦難に遭遇した時に、彼にとって問題となったのは、第一には、その苦難が自分の犯した罪に対する罰に違いないという友人たちの見方と、自分が正しく生きてきたという自負の間の食い違いであった。友人の見方は当時一般的な見方を代表し、ヨブ自身もそれが正しい見方であることを否定しきれない。しかし、一方で、彼は自分の正義を疑うこともまた出来ない。また、ヨブは、けっして神の全能を疑うこともない。それゆえ、

- 1 神は正義なら義人に苦難は与えようとするはずがない。
- 2 神は全能なら義人に苦難を与えないことができるはずである。
- 3 自分は義人なのに苦難をこうむっている。

という、三つの矛盾した命題の間で、ヨブは揺れるのである。これは、ヨブ記における神義論の論理的側面であり、組織神学での神義論の問題に通じる。ヨブは言う。

9:20 たとい私が正しくても、私自身の口が私を罪ある者とし、たとい私に罪がなくても、私を曲がった者とする。

21 私は罪がない。しかし、私には自分自身がわからない。私は自分のいのちをいとう。

22 ひとつことなのだ。だから私は言う。神は、罪のない者も悪しき者も滅ぼすのだ。

ヨブは、義人である自分が苦難を被っているという認識から、「自分は罪がない。しかし、私は自分がわからない」（9:21）と、「ひとつことなのだ。彼は罪のない者も悪しき者も滅ぼしてしまうのだ」（9:22）との命題の間を揺れる。神が義人には祝福を、悪しき者には呪いをあたえるとの約束を守るとすれば、ヨブは自分の受けている呪いという結果から、自分にその原因となる非があると帰納するしかない。しかしその一方で、目に見、自分が体験している現実からは、神が善人も悪人も等しく滅ぼしつつようにしか見えない。コッホの言うように、ヨブは、「＜善行には祝福＞構造」が歪曲された事例を直接彼自身の個人的不幸において発見したのだが、そこから一般化して、ヤハウエの一般的な行動様式がそのような歪曲を起こすものなのだというように語っている<sup>4</sup>。この21節と22節の相矛盾した思考の連続には、神義論上の問題となる矛盾の前でのヨブの混乱が表れている。

もうひとつの問題は、苦難にあってヨブが感じた神との疎外であり、それは、彼の嘆きに

明らかである。

29:1 ヨブは言葉をついで主張した。

2 どうか、過ぎた年月を返してくれ。神に守られていたあの日々を。<sup>3</sup> あのところ、神は私の頭上に灯を輝かせ、その光に導かれて私は暗黒の中を歩いた。<sup>4</sup> 神との親しい交わりが私の家にあり、私は繁栄の日々を送っていた。<sup>5</sup> あのところ、全能者は私と共におられ、私の子らは私の周りにいた。

神が共にいてくれるということは、申命記的歴史観においては確かに物理的平安や繁栄に結びつくと考えられてはいたが（cf. 申命記 28:1-14 など）、そのことよりもむしろ「神との親しい交わり」自体が、彼にとっては重要だった。それだからこそ、最終的に神が嵐の中からヨブに自ら答え、ヨブを戒めたときに、ヨブは満足するのである。前節で見たように神の言葉はヨブにとって十分な回答になった。しかしその内容以前にまず、今まで沈黙してヨブを捨て去ったと思われた神が自ら答えてくれたという、その事実自体にヨブは心の平安を取り戻したのだと考えるのが正しいであろう。

この書においては、読者だけが序章からヨブの苦難の原因を知らされており、ヨブは自分の苦難の理由を知らない。これについて、A. A. ピークは、「この書においては、ヨブが最後まで知らないままであることが必至なのである。なぜなら、彼が学ぶ教訓は、まさに、彼は神の行為の理由が理解できなくても神を信頼しなければならない、ということだからである」<sup>5</sup>と指摘している。これが教訓であるか、あるいは、神のやり方が人間に理解できなくとも、神を信頼してよいのだという救いの確約なのかは、読者の視点によるだろう。

結局ヨブは、創造主である神との出会いによって答えを得<sup>6</sup>、物理的な意味でも不幸に対してこの世での埋め合わせとなる幸いを受ける。しかし、現実世界には報われない苦難が存在し、神義論的問題は残った。

## IV 詩編

### 1 序

詩編には、複数の作者の作品が収録されており、苦難に際しても、表明されている姿勢は一様ではない。しかしながら、いくつかの目立つ傾向はあり、主に次の6つの態度が見出される。その混合が見られる場合もある。

1. 申命記的歴史観に沿った応報思想（詩編 1, 2, 5, 7, 11, 14, 15, 16, 19, 24, 34, 36, 37, 41, 45, 50, 58, 64, 65(?), 69, 75(?), 91, 92, 95, 111, 112, 128, 135 編など）。[(?)のついた詩編においては暗示されている程度]
2. 罪の自覚と赦しの嘆願（詩編 6, 19, 32, 38, 39, 40, 41, 51, 65, 95(?), 130 編など）。
3. なぜ悪人が栄えるのか（詩編 2, 3, 52, 53, 55, 58, 62, 73, 94 編など）。
4. 神を信じる私たちが嘲られている。あるいは、苦しめられている。（詩編 10, 11, 12, 13, 14, 22, 25, 31, 35, 36, 37, 40, 41, 42, 44, 56, 57, 64, 69, 74, 79, 80, 83, 84, 86, 87, 94, 109, 115, 123,

140, 141, 142, 143 編など)。

5. 敵から救ってください、敵を罰してください。信頼（詩編 3, 4, 5, 6, 7, 9, 10, 12, 13, 14, 16, 17, 18, 20, 22, 25, 31, 35, 38, 40, 41, 42, 44, 64, 69, 74, 79, 80, 83, 86, 89, 94, 109, 115, 123, 140, 142 編など）。
6. 神への賛美（詩編 7, 89, 16, 19, 21, 22, 29, 30, 31, 47, 48, 56, 57, 63, 66, 67, 68, 71, 81, 84, 87, 89, 92, 93, 95, 96, 97, 98, 99, 100, 101, 103, 104, 105, 106, 107, 108, 111, 112, 113, 114, 117, 118, 124, 134, 136, 144, 145, 146, 147, 148, 149, 150 編など）。

## 2 申命記的歴史観に立つ応報思想の影響

申命記史家の歴史解釈に沿った応報思想の顕著な表れとしては、格言的な詩編 1 が例としてあげられる。

- 1:1 いかにか幸いなことか。神に逆らう者の計らいに従って歩まず、罪ある者の道にとどまらず、傲慢な者と共に座らず
- 2 主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人。
- 3 その人は流れのほとりに植えられた木。ときが巡り来れば実を結び、葉もしおれることがない。その人のすることはすべて、繁栄をもたらす。
- 4 神に逆らう者はそうではない。彼は風に吹き飛ばされるもみ殻。
- 5 神に逆らう者は裁きに堪えず、罪ある者は神に従う人の集いに堪えない。
- 6 神に従う人の道を主は知っていてくださる。神に逆らう者の道は滅びに至る。

その他にも、

- 5:4 主よ、朝ごとに、わたしの声を聞いてください。朝ごとに、わたしは御前に訴え出て、あなたを仰ぎ望みます。
- 5 あなたは、決して、逆らう者を喜ぶ神ではありません。[…]
- 22 神を忘れる者よ、わきまえよ。さもなくば、わたしはお前を裂く。お前を救える者はいない。
- 23 告白をいけにえとしてささげる人は、わたしを栄光に輝かすであろう。道を正す人に、わたしは神の救いを示そう。

など、神は義しい者には報いとして幸いを、罪人には裁きと禍をもたらすとの確信を表す詩は多い。この応報思想は、転じて、詩人が自分の禍や病を自分の罪の罰と感じ、そこからの救いと赦しを乞う詩編群を生んでいる。その典型的な例が詩編 6 であろう――

- 6:2 主よ、怒ってわたしを責めないでください。憤って懲らしめないでください。
- 3 主よ、憐れんでください。わたしは嘆き悲しんでいます。主よ、癒してください、わたしの骨は恐れ
- 4 わたしの魂は恐れおののいています。主よ、いつまでなのでしょう。[…]



ここで、詩編作者は自分の病を「懲らしめ」と解釈し、ヤハウェに赦しと治癒を願うが、われわれは必ずしもこれを、病が実際に罪によって引き起こされたと理解する必要はない。むしろ、この詩人の罪悪感には、病に神の怒りや罰を感じる申命記史家の歴史観に影響を受けた心情が表れていると理解すべきであろう。この詩編は、

- 6:7 わたしは嘆き疲れました。夜ごと涙は床に溢れ、寢床は漂うほどです。  
 8 苦悩にわたしの目は衰えて行き、わたしを苦しめる者のゆえに、老いてしまいました。  
 9 悪を行う者よ、皆わたしを離れよ。主はわたしの泣く声を聞き  
 10 主はわたしの嘆きを聞き、主はわたしの祈りを受け入れてくださる。  
 11 敵は皆、恥に落とされて恐れおののき、たちまち退いて、恥に落とされる。

との、神への信頼と敵への呪いとという言葉で終わる。この「敵」は、病の詩人をその病ゆえに罪人として咎め苦しめる、社会の自称「義人」たちであると推測される。病人、とくに重い皮膚病の患者は、レビ記の律法などに基づき穢れたものとされ、また申命記的応報思想により、罪人として忌避された。詩人は病人をただ病人であるという理由で苦しめる社会を「敵」と呼ぶ。近似の心情は、詩編 38 や詩編 41 にも見られ、そこでの敵は、病人を忌避し、敵視する社会であることが明示されている。同様に 6 編もまた、同じ社会的苦境にある病者の叫びと読めるのである。

詩編に見られる病氣治癒を願う祈りに共通の特徴は、一方で病人自身と社会の両者が病を病者の過去の罪の結果と見ており、応報思想に立つ赦しの祈願がなされているのに対し、他方で、そのような応報観の正当性を疑問視し、病人を敵視する社会の方をむしろ敵として、その社会に対する報復や社会的苦痛からの解放を願う祈りがあるという、一見相矛盾した思いの共存である。病に罹った者は、自分の病が己の罪の罰であり、ヤハウェの怒りによるのではないかと考え、ヤハウェの慈悲を請うているが、そのことと、彼が自分を嘲り呪う人々を敵として彼らに対するヤハウェの報復を願い信じる信頼は、詩編においては奇妙に両立している。実際、たとえ自分がヤハウェに罰せられていると思う時でさえも自分とヤハウェの結びつきを信じ、ヤハウェは敵から自分を守ってくれるという信頼を保持するところが詩編作者に顕著な特徴であろう。38 編はその顕著な例である。

- 38:2 主よ、怒ってわたしを責めないでください。憤って懲らしめないでください。  
 3 あなたの矢はわたしを射抜き、御手はわたしを押さえつけています。  
 4 わたしの肉にはまともなところもありません。あなたが激しく憤られたからです。骨にも安らぎがありません。わたしが過ちを犯したからです。  
 5 わたしの罪悪は頭を越えるほどになり、耐え難い重荷となっています。  
 6 負わされた傷は膿んで悪臭を放ちます。わたしが愚かな行いをしたからです。[…]  
 12 疫病にかかったわたしを、愛する者も友も避けて立ち、わたしに近い者も、遠く離れて立ちます。  
 13 わたしの命をねらう者は罨を仕掛けます。わたしに災いを望む者は、欺こう、破滅させよう、と決めて、一日中それを口にしています。[…]  
 20 わたしの敵は強大になり、わたしを憎む者らは偽りを重ね

21 善意に悪意をもってこたえます。わたしは彼らの幸いを願うのに、彼らは敵対するのです。

22 主よ、わたしを見捨てないでください。わたしの神よ、遠く離れないでください。

23 わたしの救い、わたしの主よ、すぐにわたしを助けてください。

作者は、一方では己の病を自分が犯した「過ち」(38:4)に対する主の怒りと憤りによる「懲らしめ」(38:2)と感じているが、他方では、疫病ゆえに社会から疎外され、忌避されることを当然視はしていない。むしろ社会的苦痛からの救いをヤハウェに訴えている。実際には、この詩人が病を自分の「愚かな行ない」のためとし、明確な「罪」のためとしていないところから、詩人には取り立てて罰に値する程の罪の意識はなかったと示唆される。この詩人が自分の病をヤハウェの怒りに帰していることや周囲のものが彼を避けた背景には、むしろ申命記史家の災いの神義論が社会に広く受け入れられていたことがあると理解される。月本昭男は、「病む者を忌避し、その破滅をもくろむ「おびたしい(!)」「敵」とはそうした社会自体の象徴的表現であった」と指摘している。「しかし、こうした祈りは、病む者の前に敵として立ち現れる社会の様相を露にしながらも、そのような社会を醸成してきた因果応報思想の呪縛を断ち切ることはなかった。祈り手自身が、またこの種の祈りを伝えた祭司たちが、応報観念から自由ではありえなかったのである」<sup>7</sup>。

41 編は病気を罪の罰と見る社会の声が病人を苦しめる「敵」であることをより明白に表している。

41:6 敵はわたしを苦しめようとして言います。「早く死んでその名も消えうせるがよい。」

7 見舞いに来れば、むなしことを言いますが、心に悪意を満たし、外に出ればそれを口にします。

8 わたしを憎む者は皆、集まってささやき、わたしに災いを謀っています。

9 「呪いに取りつかれて床に就いた。二度と起き上がれまい。」

月本昭男はここでもまた、いかに周囲の人々が病者の前に「憎む」「敵」として立ち現れているかに注目し、「重い病苦を「呪い」と決めつける社会の暴力性がここに照らし出される」と指摘している。「それゆえ、「呪われた」病苦に苛まれる人は、病の癒しを祈ると同時に、こうした社会に対する報復を願わずにはいられない(11節「私が彼らに報いを返せますように」)<sup>8</sup>」

詩編作者はここで、苦しむ自分とヤハウェを同じ側に置き、自分の善意をさえ理解してくれず自分を「呪われたもの」(41:9)として裁く社会を敵とする。禍の神義論との関係を考えるならば、詩人は、苦難にあっていて者がそれだけの苦しみにふさわしいほどの罪に当然の報いを受けているわけではないことを自分の苦難の場合によって例証し、禍の神義論に異議を表明していることになる。

### 3 主よいつまで

詩編作者はしばしば、たとえ自分の病が神の罰であると感じている時でさえも、究極的にはヤハウェが自分を救ってくれることを信じ祈っている。そのことに特徴的に表れているよ



うに、詩編作者たちにとって、ヤハウェはどこまでも自分たちの神であり、自分たちの側に立って自分たちを救ってくれる主である。その信頼と和合して、詩編には、いかなる苦難にあっても、それをただ、ヤハウェが自分たちを助けてくれるまでの一時的なことと考え、究極的には救いがあると信じる信頼を示す祈りが散在する。

詩編に特徴的な神への呼びかけに、「主よ、いつまで」と、の問いかけがある。これは、自分の苦難が神に傍観されている、あるいは、神の怒りによるもの思いから、苦難の終結を神の意思次第と信じ、苦難からの救いが一刻も早くもたらされることを祈り乞い願う神への呼びかけである。「わたしの魂は恐れおののいています。主よ、いつまでなのでしょう。」(6:4)。「いつまで、主よ、わたしを忘れておられるのか。いつまで、御顔をわたしから隠しておられるのか」(13:2)。「主よ、いつまで見ておられるのですか。彼らの謀る破滅から、わたしの魂を取り返してください」(35:17)。「神よ、刃向かう者はいつまで嘲るのでしょうか」(74:10)。「主よ、いつまで続くのでしょうか。あなたは永久に憤っておられるのでしょうか」(79:5)。「万軍の神、主よ、あなたの民は祈っています。いつまで怒りの煙をはき続けられるのですか」(80:5)。「いつまで、主よ、隠れておられるのですか。御怒りは永遠に火と燃え続けるのですか」(89:47)。「主よ、帰って来てください。いつまで捨てておかれるのですか。あなたの僕らを力づけてください」(90:13)。「主よ、逆らう者はいつまで、逆らう者はいつまで、勝ち誇るのでしょうか」(94:3)。これらの呼びかけ（傍点本多）において、詩編作者は、神が自分を忘れ、自分から顔を隠し、あるいは捨て置いているとの疎外感を抱いているが、その一方で、いつか神が自分を救ってくれることを信じて疑わず、神を賛美さえするのである。

「主はわたしの嘆きを聞き、主はわたしの祈りを受け入れてくださる」6:10。「あなたの慈しみに依り頼みます。わたしの心は御救いに喜び躍り、主に向かって歌います、「主はわたしに報いてくださった」と(13:6)。「わたしたちはあなたの民、あなたに養われる羊の群れ。とこしえに、あなたに感謝をささげ、代々に、あなたの栄誉を語り伝えます」(79:13)などと彼らほうたう。

#### 4 恩寵の神義論

詩編には、自らの義を訴え、ヤハウェの裁きを求める作品が多出している。7編、17編、26編などがそうである。弱者が虐げられ、不正が横行する社会でヤハウェは正義の贖い主として呼びかけられている。不正を行う者はヤハウェに「立ち帰らない」(7:13)者、ヤハウェに「逆らう者」(17:9; 26:5)であり、詩編作者はそれらの者に対してヤハウェの正しい裁きを下り、自分を助けてくれることを祈り求めている。

しかし、詩編の中には、そのような裁きを求めるものだけではなく、自らの罪を告白し、ヤハウェの赦しを求める詩もある。詩編143は、

「143:2 あなたの僕を裁きにかけてください。御前に正しいと認められる者は、命あるものの中にはいません。」と嘆願する。ここには、申命記史家の歴史観を覆す認識、すなわち、すべての人間は主の戒めに従い切ることにはできないという認識がある<sup>9</sup>。しかし、詩人たちは絶望するのではなく、ヤハウェの憐みによる救いを信じ祈るのである。

51:3 神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐってください。

- 4 わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。[…]
- 10 喜び祝う声を聞かせてください。あなたによって砕かれたこの骨が喜び躍るように。
- 11 わたしの罪に御顔を向けず、咎をことごとくぬぐってください。
- 12 神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊を授けてください。
- 13 御前からわたしを退けず、あなたの聖なる霊を取り上げないでください。
- 14 御救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。
- 15 わたしはあなたの道を教えます。あなたに背いている者に、罪人が御もとに立ち帰るように。
- 16 神よ、わたしの救いの神よ。流血の災いからわたしを救い出してください。

ここには、自分の罪の認識、その罪からの救いは人間の償いの業によるのではなくヤハウェが「拭い」「洗い」あるいは「清める」ことによってしかないとの認識が見られる。

また、詩編 32 には、罪を認識した者がその罪を告白することによって神に赦されること、「罪を覆っていただく」(32:1) ができるというヤハウェの慈悲への信頼がある。「51:9 ヒソプの枝でわたしの罪を払ってください。わたしが清くなるように。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。10 喜び祝う声を聞かせてください。あなたによって砕かれたこの骨が喜び躍るように。11 わたしの罪に御顔を向けず、咎をことごとくぬぐってください」(51:9-11)。

ヨブ記では、人間がたとえ義であっても災いに見舞われるという認識から、因果応報の神義論に疑問が呈されたが、詩編では逆に、人間はヤハウェに対し罪を犯してもなお、その罪からヤハウェが救ってくれるとの認識が見られる。

こうした、人間の根源的罪性とヤハウェの憐みによる救いへの信頼は、申命記に発する応報思想ではなくむしろ、創世記 6 章から 8 章のノアの洪水物語と、その後には与えられた祝福の約束にさかのぼる系列である。ノアが祭壇を築き、ヤハウェに奉獻して祈ったとき、ヤハウェは「人が心に思うことは、幼いときから悪い」(創世記 8:21) との認識をもちつつ、なお、人を祝福し、二度と人間を滅ぼしつくすことはしないと約束した。人間とヤハウェとの和解は、人間が償いをするによってではなく、人間の祈りに答えたヤハウェの側からの恵みによってなるのである。それと和合してこれら詩編 32 や 51 で顕著なことは、詩編作者が自らの罪を自分で償いうると考えておらず、罪を「覆う」「払う」、咎を「拭う」などのことができるのはヤハウェのみであり、詩編作者が、ヤハウェが慈悲によって罪から自分を解放してくれると信じ祈願していることである。

ヤハウェへの信頼は、詩編中もっとも重要な主題のひとつである。月本昭男は、詩編にはヤハウェへの信頼を主題とする作品が多いだけでなく、信頼を表す最も一般的な動詞パータハ/ヒブティーアハ(語根 BTH) を見るだけでも、旧約聖書中の全用例中 45 例が詩編で用いられ、他の書をはるかにしのぎ(イザヤ書 19 例、エレミヤ書 16 例が詩編に続いて多いが、その倍以上である)、その用例を通覧すれば、詩編作者の信仰の一端が垣間見えるであろうと指摘している<sup>10</sup>。

コッホは、旧約聖書においては、罪の結果の禍はヤハウェからの罰というよりもむしろ、罪に内在する悪しき結果の表れであると考え、ヤハウェがなすのは、その結果が実際に起こるまでに熟させるか、止めるかすることなのだと言及している<sup>11</sup>。詩編作者たちは、ヤハウェ

が自分たちの罪を忘れ、覆い隠してくれること、罪の結果が自分たちに戻ってくることから「救い出してくれる」ことを望むのである。

コッホも指摘しているように、詩編においては、たとえ「神に従う人の道を主は知っていてくださる。神に逆らう者の道は滅びに至る。」(1:6) のように善と悪の両方に対して応報が考えられているような場合であっても、善への報いと罪への罰が同等に言われているのではなく、善き人々を覚える恵みの部分のほうが強調される傾向がある。1:6 のこの例では、「主」の積極的な行為が示されているのは、善に対してのみであり、神に逆らう者が滅びることは、とりわけ主ヤハウェの業とはされていないのである<sup>12</sup>。

詩編作者たちは、応報思想の浸透した社会にあって、自分たちに対してはヤハウェが究極的に慈悲と救いと救いの神であることを信じ、苦難の中でもヤハウェが自分たちを覚え、助けてくれることを祈る。彼らは救いと恩寵の神義論を保持し、それは、彼らのヤハウェへの信頼からくるものである。

## V 結論

旧約聖書において、苦難の問題への答えは、なぜ善かつ全能なる神によって作られたこの世界に苦難があるのかという、組織神学において論じられている神義論の視点からではなく、苦難の中にある人間に神は何をなすかという観点から、神と人間との信頼と関係性の保持のうちに与えられている。今日、神が善かつ全能であるならば、なぜ神は世界にこのような苦難があることを許すのかという問いから、神の存在や善性に懐疑を持ち、信仰を捨てるか、あるいは信仰の外にとどまる人々の例は少なくない。しかし、そのような思考は、ヨブ記や詩編の著者たちにはない。

これは、イスラエルの民にとってのもっとも過酷な苦難の本質が、彼らを感じた神との親密かつ健全な関係からの疎外であったことと密接にかかわる。この世に身体的、物理的苦難があろうとも、神ヤハウェが彼らを慈しみ顧みてくれているという信念が保持できる限り彼らにとってはその苦難は彼らの信仰を覆す要素とはならなかった。イスラエルの民は救い主を「インマヌエル」という名で呼び、待ち望んだ。この名は、「神われらとともにいます」という意味である。このことに彼らの苦難の意味とそれに対して彼らの求めた回答がよく表れていると言えよう。

(本論は、筆者が21年度、二松学舎大学海外特別研究員制度で与えられた英国ケンブリッジ大学神学部での客員フェローとしての1年間の研究の成果の一部である。感謝とともにそのことを記したい。)

## 注

- 1 Cf. ウェーバー『古代ユダヤ教』(下), p. 731. 「禍の神義論」とその適用については大貫隆『イエスという経験』(東京: 岩波書店, 2003), pp. 156-157 も参照。
- 2 Katharine Dell, *'Get Wisdom, Get Insight': An Introduction to Israel's Wisdom Literature* (London: Darton, Longman and Todd, 2000), p. 38.

- 3 ただし、ヨブ記が申命記史家の禍の神義論に対する反論として新たに創作されたということではない。説明のつかない苦難の存在は、すでに古来から問題として意識されていた。義人の苦難に面して神の義を問うヨブ伝承は近東に紀元前第2千世紀にさかのぼってすでに存在した。メソポタミアでは、「スメリアのヨブ」（「人とその神」として知られている“Sumerian Job,” (“Man and His God,”) が、BCE1750年頃すでに存在していたと考えられている。「バビロニアのヨブ」（「我は知恵の主を賛美する」として知られる）もまた、現存する最古の写本はBCE7世紀ながら、BCE第2千年紀にさかのぼると考えられている。BCE1000年ごろ執筆された「バビロニア神義論」は、ヨブ記と共通点が多く、ヨブ記同様受苦者とその友人との間の会話という形式を用いている。罪なき者の苦難と神の正義の問題は、古代エジプトの文学にも見られ、シリア-パレスチナでも、第2千年紀の文学に「ヨブ」という名が見られる。カナン叙事詩「ケレト王伝説」（BCE1400頃）は旧約のヨブ記と似通った枠組みを持ち、主人公は、義しい王であったにもかかわらず7人の妻とすべての子どもを失い、彼の王朝の存続の見込みを断たれるという説明のつかぬ苦難を被る。(Cf. Samuel E. Balentine, “Book of Job,” *The New Interpreter’s Dictionary of the Bible*, vol. 3 (Nashville: Abingdon Press, 2008), pp. 319-323; James L. Crenshaw, “Book of Job,” *The Anchor Bible Dictionary*, vol. 3 (New York: Doubleday, 1992), pp. 863-865.)
- 4 Klaus Koch, “Is There Doctrine of Retribution in the Old Testament?” in James L. Crenshaw ed. *Theodicy in the Old Testament* (Philadelphia: Fortress Press, 1983), p. 80.
- 5 A.S. Peake, “Job: The Problem of the Book,” in James L. Crenshaw ed. *Theodicy in the Old Testament*, p. 107.
- 6 私見では、ヨブの救いは、究極的にはこの、神との出会いを得たという事実に存する。
- 7 月本昭男『詩篇の思想と信仰 II』（東京：新教出版社、2006）、p. 185.
- 8 月本『詩篇の思想と信仰 II』, p. 217.
- 9 この認識は第4エズラ書に罪人の救いの問題という神義論的問いとして顕著に表れ、また、パウロの「正しい者はいない。一人もない」（ローマ3:10）に明示されているが、詩編においてすでに表明されていることは見逃すべきではない。
- 10 月本昭男『詩篇の思想と信仰 II』, p. 84.
- 11 Koch, “Is There Doctrine of Retribution in the Old Testament?” p. 67.
- 12 Koch, “Is There Doctrine of Retribution in the Old Testament?” p. 70.